

ノンフィクションの醍醐味

高橋うらら

ノンフィクションには、フィクションとは異なる魅力があるように思います。本当にあったことは、水戸黄門の印籠のような、説得力を持っています。

たとえば拙著『ホッキョクグマの赤ちゃんを育てる！ 円山動物園のねがい』（ポプラ社）では、ホッキョクグマの繁殖に取り組む飼育員の奮闘を書きましたが、もしフィクションなら「そんなわけないだろ」と一笑に付されてしまうようなエピソードが沢山盛り込まれています。

一例としては、メスのホッキョクグマが、赤ちゃんを産んだ後、育てずに自分で食べてしまう、というエピソード。もし、こんなことをフィクションで書いたら、

「児童書なのに残酷すぎる！」

と非難の嵐に遭うのではないでしょうか。

でも、現実には、飼育環境が悪く、母グマの精神状態が不安定だと、そういうことも度々起こっています。否定できない事実です。

また、ずっとオスだと信じていたホッキョクグマを、ほかの動物園にお婿さんとして送り出したところ、「よく調べたらメスだった！」という事件も起こっています。そして飼育員は、この判断ミスをマスコミに書き立てられ、つらい日々をおくります。

でも、もしこれをフィクションで書いたら、

「そんなことあるわけないよ！ 作りすぎ、の話だね」

といわれてしまうのではないでしょうか。

この辺りが、ノンフィクションならではのおもしろさ、ではないかと考えています。現実は厳しく、一人一人の人間にどんな運命が待ちかまえているかは、誰にもわかりません。三・一一によってノンフィクションは変わったか、という本稿の依頼者からの問いかけがありました。そういうわけでもないでしょう。いつの時代でも、どんな人でも、その人生は、波乱に富んでいます。

だからこそノンフィクションでは、困難を果敢に乗り越えていった人たちの「命の輝き」を、リアルに描くことができるのではないでしょうか。

一方で、真実を書くからこそ、ノンフィクションの執筆には覚悟がいります。

取材相手の人生の中でも、最も重要で、しかもナーバスな部分に触れることになるからです。取材の際は、相手の